

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520418

研究課題名(和文) 無アクセント方言が共通語化する過程における音韻現象と音声の実現

研究課題名(英文) Phonological phenomena and phonetic realization in the process of standardization in accentless dialects

研究代表者

宇都木 昭 (Utsugi, Akira)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：60548999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、茨城県の方言を主たる対象としつつ、千葉県の方言も視野に入れ、方言の諸側面の基礎的特徴と変異を調べた。特に重点的に分析したのは、有声閉鎖音(たとえば「が」「ば」の子音)の特徴と助詞である。有声閉鎖音の特徴をめぐっては、先行研究において、二通りの発音があり、一つのタイプは東北地方で、もう一つのタイプは他の地域で主流であることが知られている。本研究により、茨城県の大部分では東北地方と同様の発音が主流であり、県西地域の一部において両タイプが混在していることが明らかになった。文法項目の調査については、調査結果をもとに、助詞「げ」の起源について新たな提案を行った。

研究成果の概要(英文)：This study considered the fundamental linguistic characteristics and variations in the Ibaraki and Chiba dialects. Particularly, we focused on analyzing the pronunciation of voiced stops and the postpositional particles. Examining the pronunciation of voiced stops, previous literature identified two types of pronunciation: One type is dominant in Tohoku; the other type is dominant in other parts of Japan. Our results revealed that Tohoku and most of Ibaraki share a characteristic pronunciation, whereas the dialect of a limited area in southwest Ibaraki features a coexistence of both types. Concerning the grammatical aspect, we proposed a new hypothesis on the origin of the particle "ge."

研究分野：音声学・音韻論

キーワード：音声学 音韻論 VOT 言語変化 言語変異 方言文法 茨城方言 千葉方言

1. 研究開始当初の背景

方言は、様々な要因によって変化しつつ、共時的に多様な変異をみせる。その変化と変異のダイナミクスは、言語研究において重要なトピックとなる。

本研究で注目したのは、茨城方言である。茨城は首都圏から距離的にさほど離れていない一方で、その方言には東北地方南部との類似性がみられる。例えば、無アクセント、母音間閉鎖音の有声化、語頭有声閉鎖音の発音の特徴などが挙げられる。茨城方言が共通語の影響を受けてどのように変化し、また変異を示すかを明らかにすることは、言語学的に意義がある。

2. 研究の目的

茨城方言の変化と変異の研究には上述の意義があるが、そのような変化と変異を緻密に分析していくためには、この地域の伝統的な方言の特徴をふまえなければならない。しかし、茨城方言の特徴は、これまでに十分に解明されたとは言い難い状況である。そこで、茨城県における各地域の老年層話者の方言の諸特徴(音声、音韻、文法)を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

<調査地域>

茨城県内の 11 市町村(北茨城市、水戸市、美浦村、稲敷市、常総市、下妻市、八千代町、坂東市、境町、古河市、神栖市)において調査を実施した(ただし神栖市は別のプロジェクトの調査と兼ねて実施)。

また、調査を行う過程で対象を千葉県へと拡大することになったため、千葉県内の 7 市(銚子市、香取市、成田市、印西市、野田市、茂原市、南房総市)でも調査を行った。

<調査協力者>

主として、調査参加時点で 70 歳代または 80 歳代で、調査地域の生え抜きの方々にご協力していただいた。

<調査内容>

(1) 音韻・文法項目と語彙に関するインタビュー: 特定の単語をふだんどのように発音するか、どのような表現を用いるか、どのような語彙を用いるかについて、インタビューをした。これにより、音韻現象(子音の有声化など)、文法現象(助詞の用法など)の基本的特徴を明らかにすることを目指した。

(2) 単語の読み上げ: 単語リストを読み上げていただき、録音をした。録音したデータを音響分析することにより、閉鎖音の音声的特徴の解明を試みた。

(3) 会話文の作成と読み上げ: あらかじめ用意した会話文を、ふだん親しい人に話すとき

に用いる表現に変えていただき、その上で親しい人との会話のようにして読んでいただいた。これを分析することで、イントネーションの特徴の解明を試みた。

(4) 経歴と生活に関するインタビュー: これまでの経歴と生活についてうかがうことで、言語に影響を及ぼしうる諸要因(職業、住んだ土地、行動範囲など)についての情報を得た。また、これらのインタビューを通じ、自然な会話の中での発音の特徴を明らかにすることを試みた。

一部の地域・協力者については、以下の調査内容と異なることがある。

4. 研究成果

調査項目のうち、単語の読み上げにもとづく語頭有声閉鎖音の分析と、助詞「ゲ」の分析について、成果があがった。

<語頭有声閉鎖音の分析>

日本語の語頭有声閉鎖音の特徴をめぐっては、高田(2011)による研究がある。それによれば、日本語の語頭有声閉鎖音には、閉鎖の開放の後で声帯振動が開始するものと開放より前に声帯振動が始まるものの二通りがあり、老年層に関していえば、前者が東北地方に多く観察され、後者が日本国内のそれ以外の地域に多く観察されるという。高田はさらに、両タイプの発音の境界が茨城県・栃木県の中にあるとも指摘している。本研究では、二つのタイプの発音をそれぞれ“short-lag”と“prevoicing”と呼び、茨城県の老年層話者の発音の地理的分布を明らかにしようとした。

分析の結果は、以下の図 1(茨城県全体)および図 2(県西地域)に示すとおりである。

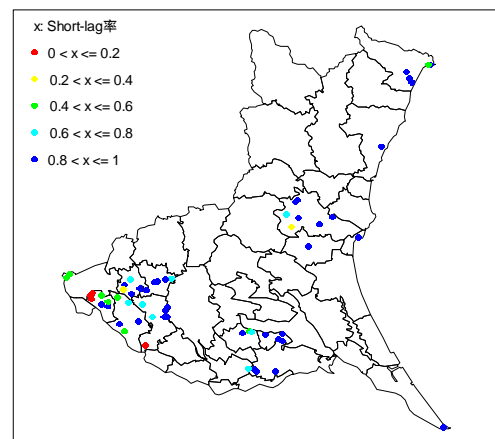


図 1: 茨城県における有声閉鎖音の発音の分布。青は大半の発音が short-lag となる話者、赤は大半の発音が prevoicing となる話者を示し、それらの中間色は一個人の中で両方の型が混在する度合いを示している。

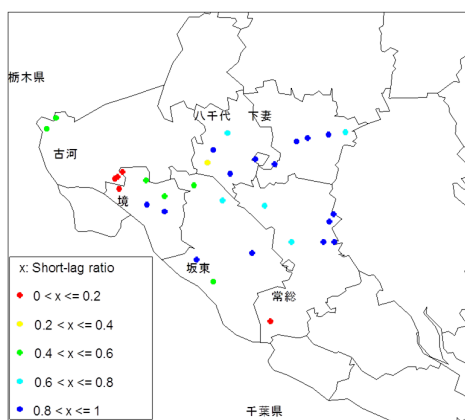


図 2：茨城県の県西地域における有声閉鎖音の発音の分布。青は大半の発音が short-lag となる話者，赤は大半の発音が prevoicing となる話者を示し，それらの中間色は一個人の中で両方の型が混在する度合いを示している。

これらの図からわかるように，茨城県の大部分では東北地方と同様の short-lag が主流であり，県西地域の一部において両タイプが混在している。

以上の研究結果は，宇都木・佐々木・五十嵐の連名により，第 27 回日本音声学大会（2013 年）で発表した。

< 助詞「げ」の起源について >

千葉県、茨城県、埼玉県、栃木県の一部では，与格助詞ゲが用いられることが知られている。例えば，「オメゲ コレ ヤル」（お前にこれをやる）というときのゲである。この与格助詞ゲの起源をめぐっては，これまでに様々な説（森下 1971，井上 1984）が唱えられてきた。

本研究の調査にもとづき，研究分担者の佐々木は，茨城・千葉で観察されるゲが，所有格 + 「家」に起源をもつという説を唱えた。この説は，佐々木が北海道方言研究会第 208 回例会および第 211 回例会で発表した。

< その他の調査項目について >

本研究において実施した調査項目は多岐にわたるが，上述の 2 点以外の調査項目については，分析および考察が現在も進行中である。これらの分析結果がまとめれば，茨城方言の変化と変異を研究するための重要な基礎を提供しうるだろう。

< 引用文献 >

井上文雄（1984）「埼玉県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 5 関東地方の方言』169-202. 国書刊行会。
高田（2011）『日本語語頭閉鎖音の研究』

くろしお出版。

森下喜一（1971）「方言にあらわれる格助詞「げ」について」『野州国文学』7，21-35。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 10 件)

佐々木冠「関東地方の与格助詞「げ」の起源再考」北海道方言研究会第 211 回例会，2015 年 2 月 15 日，北星学園大学（北海道札幌市）。

佐々木冠「関東地方の格助詞「げ」の起源に関する一考察」北海道方言研究会第 208 回例会，札幌北区民会館（北海道札幌市）。

Akira Utsugi, Kan Sasaki, & Yosuke Igarashi. “Regional variation of VOT in Ibaraki Japanese.” 第 27 回日本音声学全国大会，2013 年 9 月 28 日，金沢大学（石川県金沢市）。

<http://hdl.handle.net/2237/18699>

宇都木昭「『無アクセント方言が共通語化する過程における音韻現象と音声的实现』研究プロジェクトの概要」第 7 回筑波音声学・音韻論セミナー，2012 年 5 月 26 日，筑波大学（茨城県つくば市）。

<http://hdl.handle.net/2241/117335>

佐々木冠「水海道方言の文法構造と音韻現象」第 7 回筑波音声学・音韻論セミナー，2012 年 5 月 26 日，筑波大学（茨城県つくば市）。

<http://hdl.handle.net/2241/117337>

五十嵐陽介「無アクセント方言のイントネーションと統語論」第 7 回筑波音声学・音韻論セミナー，2012 年 5 月 26 日，筑波大学（茨城県つくば市）。

<http://hdl.handle.net/2241/117336>

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ

<https://sites.google.com/site/utsakr/Home/ibaraki-hogen>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇都木 昭 (Akira Utsugi)・名古屋大学国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：60548999

(2)研究分担者

佐々木冠 (Kan Sasaki) ・ 札幌学院大学経営
学部 ・ 教授

研究者番号： 80312784

五十嵐陽介 (Yosuke Igarashi) ・ 広島大学文
学研究科 ・ 准教授

研究者番号： 00549008